

琉球・台湾考古学は国際政治の犠牲者か？

- 民俗(族)問題からみた考古学方法論変遷の検討 -

角南聡一郎 ((財)元興寺文化財研究所)

はじめに

発表者の立場は、琉球、台湾出身ではない第三者である。第三者たる外国人の駆け足調査に対する台湾の民俗学者劉枝萬による批判もある。本来ならば、発表者は琉球、台湾について語る資格などないのかもしれない。しかし、第三者的立場でなくては見えてこない部分もあるのではないだろうか。逆に第三者だからこそ、広い視野から両者の比較を試みることが可能ではないかと考える。本発表では、発表者の考古学研究という営為もまた近現代の所産であるという考えを前提として、国際政治に翻弄され、幾度も帰属が変化した両地域において、考古学という学問を例に取りながら、その方法論の変遷を学史から考えてみたい。これがどのような政治的問題とリンクしているかについても言及したい。無論、このような問題は、他の学問にも所在しているであろうし、中国、韓国などの地域でも想定される事態である。国土分断という事態は、現状では北朝鮮と韓国の関係が典型であり、かつてはベトナムでもそうであった。何もこのような巨視的レベルではなくとも微視的レベル(例えば第三者が調査地で他者として学問的に関係する場合など)でも、不可避な問題であるのかもしれない。

1. 琉球国 琉球藩 沖縄県 琉球政府 沖縄県

琉球と付近の島々の呼称は、明治時代前半には南海諸島と呼ばれることが一般的であった。これに対して後述する田代安定は、海南の呼称を用いていた。その後、歴史学・民俗学では南島という呼び方が一般的になり、現在は本州から見て南西に位置していることから、南西諸島と呼ばれている。

琉球列島 琉球弧と同義語。九州と台湾の間に、北は種子島から南は与那国島に至る約 1200 kmの広がりをもつ弧状列島をさす地質学・地理学の用語。一連の地帯をもち、洋島である大東諸島と大陸棚上にある尖閣諸島を含まない。

南西諸島 琉球列島に大東諸島と尖閣諸島をくわえた範囲をさす用語。1887(明治 20)年頃の水路部によって命名された官製地名であり、形式地域名とされる。

南島 『続日本紀』文武天皇 2(698)年に、種子島、屋久島、吐喝喇列島、奄美諸島を指す総称として登場した歴史的用語。その包括する範囲は時代とともに拡大し、最終的に現在の琉球列島と重なる。おもに島外人が、琉球列島の文化や歴史的事象を扱う場合に使用してきた。(以上、木下編 2003 の定義による)

琉球国は 1609 (慶長 14) 年の薩摩藩琉球侵入以来、日本と中国に両属してきた。明治政府は強硬に琉球の国内化を進め、清国はそれに対して強く抗議をした。琉球の所属問題は、1872 (明治 5) 年の琉球藩設置から 1879 (明治 12) 年の廃藩置県と、それによって生じた琉球分島案の結末 (日清戦争の日本側勝利) に至る一連の動きの中で解決された。このうち、松田道之を処分官とする廃藩置県断行の過程が琉球処分である。あるいは、広く琉球所属問題解決までのすべてを指すが、このことは形式的には、1872 (明

治 5) 年までは琉球王府が存在していたことを意味するものである。1945(昭和 20)年の終戦後、沖縄はアメリカ軍の占領とともに日本から切り離されて米軍の統治下に置かれた。続いて 1946(昭和 21)年 2 月 2 日に北緯 30 度以南の奄美諸島が、日本の行政権から切り離され、米軍の統治下に入った。1952(昭和 27)年 2 月 4 日にサンフランシスコ平和条約に基づいて、北緯 29 度以北(吐噶喇列島の十島村)が日本へ復帰した。1953(昭和 28)年 12 月 25 日に奄美諸島が日本へ復帰した。1969(昭和 44)年 11 月の佐藤総理とニクソン会談で沖縄返還が合意され、沖縄返還が実現したのは 1972(昭和 47)年 5 月 15 日のことである。

参考に小笠原諸島も見ておきたい。小笠原諸島では、1944(昭和 19)年戦況悪化のため一般人のほとんどすべて(6,866 人)を本土に強制疎開した。しかし、終戦後、沖縄同様にアメリカ軍の占領下に置かれた。この時全島の清掃命令を誤認し、民家のほとんどを焼却したと言われている。1946(昭和 21)年 10 月欧米系島民のみに 9 名が帰島を許され、漁業と米軍労働に従事した。1967(昭和 42)年に佐藤・ジョンソン会談で小笠原の 1 年以内の返還が決定し、小笠原復帰対策本部が設置された。1968(昭和 43)年に小笠原諸島は返還された。

沖縄の考古学史は、高宮廣衛、當眞嗣一によるまとまったものがある(高宮 1975, 當眞 1995)。これらを参考にしていきたい。モノ研究という視点では、田代安定が先鞭をつけた。田代は鹿児島市出身の植物学者で、東京帝国大学人類学教室嘱託として琉球を調査した(田代 1887,1889)。後に台湾に渡り植物学の研究を行った。その後、笹森儀助などによっても考古学的報告がなされた。琉球最初の発掘調査は、1904(明治 37)年鳥居龍蔵により行われた。鳥居は、本島では伊波貝塚、八重山では川平貝塚の発掘を実施した(鳥居 1905)。鳥居のこのような動きを後押ししたのは、当時の日琉同祖論であったのは否定できない。

その後、大正後期から昭和初期にかけて、大山柏ら本土の研究者によって発掘調査が実施された。これらの資料の多くは、本土へ持ち帰られた。そして終戦を迎える。

アメリカ統治時代には、本土との研究者の往来も制限された。そのような中、琉球政府による発掘調査は、植物学者としても著名な多和田真淳が主導した。多和田は、沖縄出身で戦前に沖縄県師範学校を卒業した。この期間の調査は、戦前の本土式の考古学的方法の多和田自身の解釈と再生産の結果と考えられる。

一方、1960 年代後半には、高宮廣衛(沖縄国際大学)、友寄英一郎(琉球大学)などによって、沖縄考古学会が結成された。アメリカ統治下時代、アメリカ人による考古学的調査も若干行われたようであるが、大きく影響を与えるには至らなかった。しかし、当時の若手研究者はアメリカに留学するものも多かった。沖縄沖繩諸島の貝塚分布と先史時代編年を確立した、高宮は、カリフォルニア大学で人類学・考古学を学んだ。つまり、間接的にアメリカの方法が持ち込まれた形となったのだ。

ある沖縄の考古学者は言う「アメリカ統治下の 30 年間があったから、沖縄の考古学は本土にこの期間分遅れている」。しかし、このような理論が成立するのは、あくまで本土の日本的考古学を中心に考えた場合である。エスノセントリズム的発想に近いかもしれない。アメリカの影響を受けたことは負の要素ばかりではない。沖縄の考古学が、現在もなお文化人類学や民俗学と頻繁に交流があることは正の要素とはいえないだろうか？だが逆に、サンフランシスコ平和条約による、アメリカの沖縄統治正当化は、米軍基地建設を促進させたのであり、これが現在まで基地問題として継続している。宜野湾市普天間基地移転問題に伴う発掘調査問題など、沖縄の考古学事情は米軍基地問題と隣り合わせである。

2. 台湾 台湾総督府 中華民国 台湾？

台湾は 17 世紀にオランダ、スペインによる植民地支配から鄭氏政権を経て、18・19 世紀は清の支配下にあった。日清戦争後の 1895(明治 28)年に清から日本へと割譲された。以来、1945(昭和 20)年の終戦ま

で 50 年間支配下に置かれた。その後、中華民国へと光復を果たすが、中国大陸での共産党と国民党の内戦は、国民党の形勢不利となり、1949(昭和)年 8 月、台湾に渡った蒋介石は台北市北部の陽明山を本拠に定め、国民党総裁として命令を下すようになった。10 月 1 日、共産党が「中華人民共和国」の建国を宣言し、国民党の敗北は決定的なものとなった。以来、中華民国とは台湾のことを指す語となった。

台湾考古学の歩みは、東京帝国大学人類学研究室雇員の鳥居龍蔵が、1986(明治 29)年に台湾東海岸で石器を採集したことに始まる。続いて鳥居は 1987(明治 30)年に台北市円山貝塚を発掘した(鳥居 1987)。1928(昭和 3)年ハーバード大学に留学した民族学の移川子之蔵により台北帝国大学土俗人種学教室が設立され、助手には慶応大学出身で、考古学・民族学の宮本延人が着任した。移川、宮本は発掘調査など考古学的調査も研究室で実施している。ほぼ同時期に台北帝国大学医学部に形質人類学・考古学の金関丈夫が着任した。金関や金関の弟子である国分直一らによっても発掘調査が実施された。

戦後は、中華民国政府に留用された宮本、金関、国分らによって資料の整理や発掘などが行われたが、ほどなく帰国した。その後は、大陸出身の外省人考古学者の時代を迎えることになる。外省人研究者の代表は、安陽遺跡発掘を主導した李済である。大陸の清華大学出身で、ハーバード大学大学院で人類学を修めている。1926(昭和元)年、中国人ではじめて発掘調査を行った人物である。ちなみに、中国で最初の発掘調査は、スウェーデン人地質学者アンダーソンによって 1921(大正 10)年に行われた。台湾では中央研究院歴史語言研究所において研究を続けた。本省人研究者の代表は宋文薫である。彼は台湾の日本語世代で戦前の台湾大学出身であり、国分直一とは師弟関係にある。戦後は台湾大学考古・人類学系教授として学会をリードした。台湾大学出身の張光直は外省人であったが、ハーバード大学で学んだ後アメリカに移住し、エール大学、ハーバード大学で教鞭をとった。しばしば台湾へも帰省し、戦後の台湾考古学会に影響を強く与えた。台湾の考古学者は、アメリカ、イギリスへと留学するものが多く、日本への留学は少ない。日本語世代が高齢化した現在、日本との関係は益々希薄になっているといわざるを得ない状況にある。

以上のことから台湾において、考古学方法は以下のように変遷したと考えられる。日本植民地時代は、一方で、アメリカで人類学を学んだ移川らによる研究があり、他方では京都大学で日本考古学の創設者、濱田耕作の影響を受けた金関、国分らによる、当時の日本考古学主流的派スタイルの研究があった。戦後は国民党に伴って台湾に来た、李済らの外省人考古学による研究が続いた。無論、宋ら日本語世代本省人考古学者も活動はしていた。だが、多くの考古学者は、現代中国で主流である、文化類型論的考古学とも異なったスタイルであり、この辺りにもアメリカで人類学を学んだ李済の影響があることが推測される。現在、台湾考古学のスタイルはアメリカ的であり、日本考古学との方法の違いは著しい。

3. 東アジア世界観のパラダイム転換

これまで見てきたような帰属のゆらぎ・植民は、国家の中心地では起こらない。周辺部でのみ生じる悲劇である。そもそも中心/周辺という概念は、本州中心史観による定義である。かつて経済学者玉野井芳郎が目指した、地域主義的な文化研究の発想(玉野井 1980)を援用するならば、中心/周辺という歪んだ歴史観を修正することが可能ではないかと考える。日本史(国史)とは中央集権国家の為政者側から見た歴史観であり、これのみが歴史ではないことを研究者は自覚する必要がある。なるほど、世界システム論的視座からすれば、中心も周辺もシステム(例えば物流システム)では関連していることは明白である。しかし、日本を中心に据えた世界観のパラダイム転換を図る必要があるだろう。

近年、世界観を問い直す提言が各学問からあがっている。以下、事例を紹介してみよう。政治学者和田春樹は、日本を中心に、日本海を中心にして世界を見るのではなく、大陸の方からこの地域を見直すという概念を強調する(和田 2003)。奄美をフィールドとする考古学中山清美も、従来の南島の位置を逆さにし

て考察してみることで、奄美の位置が大陸の大きな湾の外周部に位置していることが良く理解できるとする(中山 2003)。

鳥居龍蔵は、千島アイヌの調査も行っている。鳥居自身も政治的に庇護を受けながら調査を行った部分も多い。しかし、鳥居の頭中にある地図には、国境は存在していなかっただろう。これからは鳥居のごとく、現在の国境や国際政治にとらわれない、地図を描くことが必要だろう。

【引用・参考文献】

- 金関丈夫・国分直一 1979 『台湾考古誌』 法政大学出版局
- 木下尚子編 2003 『先史琉球の生業と交易 改定版』 熊本大学文学部
- 国分直一 1972 『南島先史時代の研究』 慶友社
- 国分直一 1980 「李済博士の足跡」『えとのす』13 新日本教育図書
- 白木原和美 1971 「陶質の壺とガラスの玉」『古代文化』23-8・9(財)古代学協会
- 角南聡一郎 1999 「台湾の土器棺葬」『元興寺文化財研究』71(財)元興寺文化財研究所
- 角南聡一郎 2001 「忘れられた日本植民地文化」『日本民俗学会第53回年会研究発表要旨集』日本民俗学会第53回年会実行委員会
- 角南聡一郎 2001 「日本出土の樹皮布叩石」『盾列』11 奈良大学考古学研究会
- 角南聡一郎 2003 a 「東アジア世界と南九州・南島の土器棺葬」『人類史研究会第14回大会発表予稿集』人類史研究会
- 角南聡一郎 2003 b 「台湾における日式建物と日式墓」『墓標研究会第10回例会発表資料』
- 角南聡一郎 2003c 「台湾と日本の鏝絵」『建造物彩色の保存と修復』クバプロ
- 角南聡一郎 n.d. 「日本植民地時代台湾における物質文化研究の軌跡」
- 宋文薫 1995 「鳥居龍蔵と台湾」『考古学ジャーナル』390 ニュー・サイエンス社
- 桑兵(中西裕樹訳) 2001 「東方考古学協会について」『西洋近代文明と中華世界』京都大学学術出版会
- 高宮廣衛 1975 「第三部 第一章 考古学」『沖縄県史』沖縄県教育委員会
- 田代安定 1887 「人類学上ノ取調ニ付キ沖縄ヨリノ通信」『東京人類学会雑誌』2-6
- 田代安定 1889 「琉球西表島古見村ノ土器」『東京人類学会雑誌』4-40
- 玉野井芳郎 1980 『地域主義の思想』農山漁村文化協会
- 當眞嗣一 1995 「南西諸島の考古学」『展望考古学』考古学研究会
- 鳥居龍蔵 1894 「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」『東京人類学会雑誌』9-94
- 鳥居龍蔵 1987a 「東部台湾に於ける各蕃族及び其分布」『東京人類学会雑誌』12-136
- 鳥居龍蔵 1987b 「台湾探検者鳥居龍蔵氏ノ消息」『東京人類学会雑誌』13-139
- 鳥居龍蔵 1905 「沖縄諸島に居住せし先住民に就て」『東京人類学会雑誌』20-227
- 中山清美 2004 「赤木名グスクの発掘調査の成果から」『グスク文化を考える』新人物往来社
- 野口武徳 1977 「解説」『沖縄結縄考』ペリかん社
- 森威史 1995 『台湾の先史文化』静岡人類史研究所
- 森威史・角南聡一郎 2004 「日台考古学間交流の現状:近年の両国間研究交流と日本における台湾考古学文献目録」『台湾原住民研究』風響社
- 和田春樹 2003 『東北アジア共同の家』平凡社
- 吉開将人 2004 「近代中国における文物事業の展開」『歴史学研究』789 青木書店